
運命の起点は此処に在り(遙か3)

時文れいや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の起点は此処に在り（遙か3）

【Nコード】

N3382Q

【作者名】

時文れいや

【あらすじ】

本当の始まりはいつなのか。

<前書き>

この話を読む前に

神子の最初の一周目を補完&九望話です。

最初の一周目とゲームとの相違点

- ・リズ先生、九郎はいない
- ・つまり八葉は揃わない
- ・弁慶は源氏についていない
- ・そして龍脈を汚しはしたが断ってはいない
- ・黒龍は子供の姿で存在している
- ・九郎が存在しないのでオリキャラ「阿野全成」を源氏の大將とする

オリキャラ設定

あのぜんじょう
阿野全成

28才

頼朝の信頼はそれなりに厚い

冷静で真面目な性格、どこことなく威厳を感じさせる

参考

リズ先生ルート

公式設定資料集

ウィキペディア

協力者

赤坂紗弥さま

キャラの口調などを見直ししてもらっています。

宇治川での出会い

激流に流され、気がついた時には見知らぬ河原にいた。

わけがわからず呆然としていたが、化け物に襲われていた人を見過ごせずに飛び出していた。

それはなんとか倒すことができた。

そこで、私を呼んだ子供が白龍ということ、共に「怨霊」を「封印」した朔という人が「黒龍の神子」であること、自分がその対である「白龍の神子」らしいことを知った。

見ず知らずの土地で、何をどうしたらよいのかわからず、朔の言うとおりに橋姫神社へ向かうことにした。

その途中、譲くんと合流できたものの、また怨霊と出くわし、戦った。

もちろん一度も剣を持ったことのない私はただ闇雲に刃が相手に当たるようにと振り回していただけたかったが。

なんとか橋姫神社にたどり着いた。

すると向こうから誰かが駆け寄ってきた。

「あ、朔！無事だっただね。心配したんだよ」

「ええ。大丈夫よ、兄上」

「それで、その子は？」

「私は春日望美です。朔の対……らしいんですけど」

「そうなんだ。俺は梶原景時。源氏の戦奉行なんだ。とりあえずこっちについてきて。一応、この場を預かってる人に報告しないといけないからね」

景時さんに連れられて社の前へきた。

そして景時さんは社の中に入っていった。

おそらく、ここで一番偉い人に私たちのことを報告するのだろう。これからどうなるのか、ただただ不安だった。

しばらくして、景時さんが勇ましそうな鎧を纏った男の人と一緒に

社の中から出てきた。

そして、その人はこう言った。

「私は阿野全成と申す。貴殿らがここへ来た経緯を詳しく教えてもらおうか」

「阿野全成！？源義経じゃないのか！？」

「源義経だと？・・・そんな者は源氏にはおらぬ。それでなぜこの戦場に参られた？」

「えっと・・・、どうしてここに来たのかは私でもわからないんですけど・・・」

「神子は私が呼んだんだよ。私の神子だから」

「神子・・・か。朔殿、このほうの者が言うことに偽りはないな」「はい。望美は怨霊を封印しました。これは白龍の神子であることにちがいません。また、この子が白龍であるかどうかは京にいる黒龍に聞けばわかります。ただ、私は白龍に違いないと思っていますが」

「そうか。景時、この者らを京へ送りとどけよ。そこで改めて話を聞こう。これ以上時間を割くのはおしい。ここならばなおさらな」

「御意。それでは失礼いたします」

こんなにあっさりと話がついてしまって、拍子抜けをした。

もっと、難しいことを聞かれると思ったのに。

どことなく釈然としないまま、私たちはとりあえず平等院を目指した。

待ちどき

平等院につくまでの間にも何度か怨霊と出くわしたけど、景時さんのおかげでか、ヒヤツとすることもなく、到着することができた。

ここで戦が終わるのを待って、本陣と一緒に京に上るらしい。景時さんと朔は連れてきた負傷した兵たちの指示をしたり、看護をしたりしに行ってしまった。

私と譲くんは何もすることがなくて、時間をもてあましていた。そのとき、ふと、全成さんと譲くんの会話が頭に浮かんできた。

譲くんは全成さんのことは知っていたみたいだったけど、大将だということにすごく驚いていた。

一度気になってしまうと、なんとなくすっきりしなくてもややもやしてきてしまった。

「ねえ、譲くん。さっき全成さんと話をしたでしょ？なんかびっくりしてたみたいだけど、どうして？」

「先輩は源義経って知ってますよね」

「うん、たしか源頼朝の弟で、源平合戦のときに活躍したんだよね」
「そうです。たしか宇治川の戦いでも義経が指揮をしたことになっているはずなんです。ですが、全成さんが指揮をしていて、なおかつ義経がいない。本当に俺たちは異世界に来てしまったんですね・・・」

「そうだね。私もまだびっくりしているけど・・・。。それで、全成さんのことは知っているの？」

「彼は俺たちの世界だと、義経の兄で同じく源平合戦で活躍した人です。ただ、彼は源平合戦が終わっても長生きしていたので覚えていたんですよ」

「へえ・・・。教えてくれてありがとう、譲くん」

「いいえ、これくらいどうってことないですよ」

他にも取り留めのない話をしているうちに、いつしかかなり時間が

経っていたようだ。

朔と景時さんは用事をし終えて戻ってきた。
しばらくすると、景時さんに伝令が来た。
あともう少しで本陣が此処にくるらしい。
そして、私たちは京に上ったのだった。

休日の始まり

京についてから、あっという間に時間が過ぎていった。

季節は冬から春へと移り変わり、驚きの連続だったこちらの世界へも慣れはじめてきた。

私は白龍の神子として、源氏の怨霊との戦闘に加わることになった。譲くんも一緒に戦うと言ってくれた。

全成さんの好意で練習場に顔を出すのを許可してもらった。

私は剣を持ったこともなかったし、譲くんは弓道をやっていたけど、実戦での使い方とは全然違うようだったからとても助かった。

ただ、そう計らってくれた全成さんには京に来てから一度も顔を合わせたことがないけれども。

ある日、いつもと同じように練習場に行こうとしたら朔に引き止められた。

「なに、朔。どうかした？」

「望美、今日はちょっと休んだらどうかしら？」

「うーん、どうしようかな。そうしたいのも山々だけど、私、まだ怨霊との戦いになったら足手まといになりそうだから、練習もしたいんだけど・・・」

「先輩、たまには息抜きも大事だと思いますよ。根をつめすぎても逆効果ですし」

「そういうものなのかな。じゃあお休みにしようかな。どうせお休みにするなら京を見て回りたくないな。ちょうど桜が見ごろみたいだし」
「それもいいですね」

「でも、今は落ち着いているとはいえ、怨霊が出るのは変わらないわ。外に出るのは控えたほうがいいと思うわ」

「大丈夫だよ、神子。私たちも一緒に行くから」

「黒龍まで・・・。そう言うなら行きましょう。私も桜が見たかったし」

「じゃあ、朔、支度しないと!」

「ええ、わかったわ」

私が貸してもらっている部屋に朔を引っ張り込む。

そんな私に朔が苦笑する。

それに私はもう、と顔を膨らます。

「だって、ここにきてからお出かけなんて初めてなんだよ」

「はいはい、わかったわ、望美」

朔に手伝ってもらいながら支度をする。

ここにはカバンなんてものがないから、お弁当とかを風呂敷に包むのに四苦八苦した。

あまりの不器用さに目を丸くされてしまった。

気恥ずかしくて、注意をそらそうと話題をふろうとした。

そこに支度をし終えた白龍と刻流が飛び込んできた。

「神子、支度、終わった?」

「ええ、ちょうど終わったところよ」

「じゃあ、行こう!」

そう言ってくつついてきた白龍と手を繋いで表に出た。

朔と黒龍も手を繋いで、讓くんは私たちの荷物まで持って外に出てきた。

「じゃあ、どこから行こうか、朔」

「どこがいいかしらね・・・」

と話しながらとりあえず足を進めた。

桜巡り

「どこにお花見に行こうかな」

「神子、あっち。見せたいものがある」

そう白龍が言ってそれがあるだろう方向を指す。

「あっちには何があるの？」

「あの辺りで桜が有名なところと言えば仁和寺があるわね」

「そこに行きたいの？」

「うん！」

「神子、私はあっちがいい」

黒龍は朔の袖を引っ張っている。

ちよつと頬が膨れているので、もしかしたら白龍に焼きもちを焼いたのかもしれない。

むくれた顔が可愛くて、私と朔はくすりと笑った。

「黒龍は神泉苑がいいのね」

朔がそう言うと、黒龍はこくり、とうなずいた。

「じゃあ、どんな風に回りますか？」

「そうね……。仁和寺から神泉苑に行くのが良いと思うわ」

「じゃ、行こう！！」

仁和寺に着くと、見事な桜があった。

ちよつと咲き綻んでいて、花見にはちよつと良い頃合のようだった。桜を楽しみながら昼食をとった。

しばらくの間、華やかな風景を見、それから神泉苑へ向かった。

神泉苑ではなぜだか人が大勢いた。

人ごみの中には、全成さんと景時さんもいた。

「景時さん、ここで何をしていますか？」

「あ、望美ちゃん。今からここで雨乞いの儀式が行われるんだけど、後白河院に全成様と一緒に招かれちゃってね」

「へえ……。そうなんですか」

それから、私はちらりと全成さんを見て、意を決して話しかけた。

「あの・・・全成さん。いつも練習させてくれてありがとうございます」

全成さんは特に意に介さなかったのか、表情一つ変えなかった。

「ああ、そのことか。別に構わない。それより、何でここに来た？」

「お花見に来たんですけど・・・。この人ばかりじゃ無理そうですね」

少しがっかりして言った。すると景時さんが、

「じゃあ、代わりに儀式を見ていくかい？全成様、構いませんよね」

「構わないと思うが、一応後白河院にお伺いを立ててくる」

全成さんが席を立ててしまった。

しばらくすると、下働きの人がきて私たちの分の席を用意していった。

全成さんが戻ってくると、雨乞いの儀式が始まった。

儀式なんていうから、なにか普通ではないことをするのだと思っていたけれど、なんてことはない舞だった。

舞なんて学校の音楽の授業のビデオでしか見たことはなかった。

生で見る舞はパツとはしないが、とても落ち着きがあり美しかった。だけれども、やっぱり雨は降らまいます儀式は終わった。

「朔、さっきの舞すごかったね。私もあんなふうに舞ってみたいな」

「それだったら、私が教えましょうか？」

「え、朔って舞が舞えるの？」

「ええ、少しだけなら」

「じゃあ、明日教えてもらえる？」

「いいわよ」

明日の予定を考えながら、私は浮かれた気分で帰った。

舞い、断つ

翌日、私と朔、白龍、黒龍は舞殿を貸してくれるという下鴨神社に行った。

朔がお手本として舞う。

朔の舞は昨日見た白拍子の舞よりも格別に綺麗だった。

「朔……、すごい……」

私がそういうと、朔は控えめに微笑んで、黒龍はどこか嬉しそうだった。

黒龍が嬉しそうな顔を見せたのは初めてだ。

もしかしたら、と白龍を見る。

「なあに？ 神子」

「ううん、なんでもないよ」

白龍たちはたぶん、自分の神子が褒められたら嬉しいんだろうな、と思った。

朔が一通り舞い終わって、いよいよ本格的に教えてもらう。

体の運び一つがとっても難しい。

何とかぎこちないながらも一連の動作ができるようになった。

だいぶ日が暮れてきたので、帰ろう、と白龍の手を引こうとした。

けど、白龍はどこかへ走って行ってしまった。

それを慌てて追いかける。

東の方角へ少し行ったところで白龍を見つけた。

「だめじゃない、勝手に走って行っちゃ」

「神子……ごめんなさい」

「どうしてこっちへ行ったの？」

そう問うと、白龍はうなだれながら、

「地の朱雀の気、感じたから。でも、もうわからない」と言った。

「そんなことわかるの？」

「うん、わかるよ。神子も、八葉も、私の対も」

そういうもののなか、と思いつながら帰路に着いた。

帰ってきてのんびりしていたら、景時さんが帰ってきた。

景時さんの後ろには全成さんがいた。

全成さんがここに来るのは今までなかったから、びっくりした。

全成さんのことだから、何か用事があったて来たのだろうけど。

そんなことを思っていたら、案の定そのとおりだった。

「長岡八幡宮で強力な怨霊が目撃されたそうさ。そこで明日、望美殿と朔殿の手を借りて退治しようと思うのだが、よいかな？」

お世話になっているのだ、これぐらいはしなくてはと思います承知したのだけれども、長い間怨霊と戦ってはいなかったもので、不安になった。

不安を押し殺そうとしているうちに、いつの間にか眠ってしまい、目が覚めたときにはもう日が昇っていた。

不安がぬぐえないまま長岡八幡宮へ向かう。

長岡八幡宮をめをのまにしたら、どこからかおどろおどろしい声が聞こえてきた。

その声が途切れると、突然目の前に桜花精と言う怨霊が現れた。

桜花精は全成さんから聞いたとおり強かった。

私や譲くん、朔の攻撃は全くと言うほど当たらず、景時さん、全成さんの攻撃も外れることがままあった。

白龍、黒龍も似たようなものだった。

何とかして封印できるまで弱らせないと、と焦りだけが募っていく。その時、何でかわからないけど、”術”というものが朧げに頭に浮かんだ。

何なのかよくわからなかったが、気がついたら、

「朔、譲くん、力を貸して！」

と叫んでいた。

「望美・・・私の力、あなたに託すわ」

「先輩の助けになるなら」

二人は面食らいながらも力・・・気配を高める。

「いざほとばしれ、奔水衝！」

私の元へ集められた気を剣で断つ。

すると、激しい水が生じて、怨霊を押し流した。

白龍と黒龍が叫ぶ。

「神子、封印を！」

「「かのものを封ぜよ！」」

光が満ち、怨霊が消える。

景時さん、全成さんから劳いの声をかけられる。

それにぎこちなく返事をする。

良かった、良かったけれど、これから先もこんなことがあると思っ
たら、手放しでは喜べなかった。

戦場へ、そして別れ

京での怨霊騒ぎが一段落ついて数日後、平家が京へむけて行軍を開始したと言う知らせがあったらしく、源氏はその手前、三草山付近でくい止めることになった。

平家は怨霊を使っている。

私たちは怨霊を封じるため、同行を命じられた。

とうとうこの日が来てしまったのだ。

陣の設営場所、馬瀬に着くまでの間、私の頭の中はそのことではあった。

馬瀬に着き、改めて平家の情報を整理しているようだ。

先ほど、体よく景時さん以外は追い払われてしまった。

来れたら戦が始まる。

もし、怨霊だけでなく人も斬ることになったら、逆に兵に襲われたら、そう考えると怖くて仕方がなかった。

一人でいるのが嫌で、朔の所へ行く。

朔ならきつと相談に乗ってくれると思ったから。

「緊張しているの、望美？」

「ううん、そうじゃなくて・・・怖い・・・」

「そうね、・・・私も怖くないと言ったら嘘になるわ」

「どうして朔は落ち着いていられるの？」

朔は切なげに笑って、

「私も武家の出だからかしらね・・・」

そう言うのと、それから戦が始まりが告げられるまで私と一緒にいてくれた。

私たちは後方待機するように伝えられた。

はなから怨霊は出さずに混戦状態のときに背後から襲いに来るだろうと言う判断らしい。

これから山ノ口と鹿ノ口を同時に同時に正面突破するみたいだ。

それが良いのか悪いのか私にはわからない。

平家が怨霊を出さなければいいと思った。

そうすれば私たちは守ってもらえるのにと願った。

しかし、現実は無情だった。

主要部隊が山ノ口と鹿ノ口に行ってしまったてしばらく経ってから、読みどおりに怨霊が現れてしまった。

一面、怨霊にあつという間に覆われている。

たった数人でこれに挑まなければならないなんて。

しかも、八葉である景時さんは鹿ノ口の司令を命じられているためここにはいない。

つまり、戦慣れをしていない三人と大部分の力を失った竜神しかないのだ。

怨霊たちは私たちに気づかず、三草川の方へ向かっていく。

その先にはそればれの後方部隊があるはずだ。

追わなければ。

でも、関わりたくない。

・・・でも・・・でも。

私は剣の柄をぎゅっと握り締めた。

「先輩？」

「・・・追いかけてよう・・・」

「望美！？それは無謀よ！」

「でも、私たちしか怨霊は封印できないんだよ・・・行くしかないでしょ!？」

私は思わず叫んだ。

譲くんと朔は口をつぐんで、白龍と黒龍は気まずそうに目をそらした。

それを一瞥して歩き出す。

私の後を慌てて追いかける足音が響いた。

私たちは三草川に着くやいなや怨霊へ切りかかった。

傷つきながらも数十対を封印した。

その時、山ノ口の方向が騒がしくなり、軍が引き返してきた。

良かったと思ったのもつかの間、軍は待ち構えていた怨霊の姿を見てパニックになってしまい、到底合流できそうもなかった。

それでも、怨霊に囲まれているよりはマシだと、包囲を斬り崩しながらそちらへ向かう。

向かっていく途中で今度は鹿ノ口から軍が戻ってきた。

こちらはいかにもほうほうの体で逃げてきたのだとわかるほどボロボロの状態だった。

これがますます源氏軍を動揺させた。

もう、敵も味方も関係なく暴れだす兵も出始めた。

喧騒の中、皆とはぐれてしまった。

一人で怨霊を斬り捨てる。

疲労が溜まっていつて、気力なんてものももう保てなくて、泣きたくなった。

それでも死にたくないから剣を振るう。

でも、体中がボロボロで、腕や足は切り傷でいっぱいだ。

そんな時、白龍が私を見つけて翔けてきた。

安堵した瞬間、背後に衝撃が走った。

反射的に剣を反す。

相手が倒れる。

「神子！！」

白龍が私に縋りつく。

「大丈夫、まだ大丈夫だから」

白龍の手を引いてこの場を離れようとする。

もう自分だけじゃここに生きているのさえも難しい。

せめて、朔たちが見つかればいいのだけれど。

そこで気がついた。

こちらをじりじりと追い詰めるような気配に。

「白龍、逃げるよ」

「うん」

これを合図としたのか、怨霊が一斉に襲い掛かってきた。
それを何とか潜り抜ける。

避けて進むうちにいつの間にか行き止まりにいた。

もう、逃げられない。

白龍を守ろうと後ろへとかばう。

「神子、逃げて」

「逃げれないよ。私が怨霊と戦うから白龍は下がっていて」

「だめ。神子だけでも、逃がす」

え？と振り返った私が見たものは、白龍が自分の喉もとの逆鱗を剥がしたところだった。

薄く消えてゆく白龍に手をとられ、逆鱗を握らされる。

その瞬間、逆鱗から光が満ちた。

第二章について

光に包まれる。まぶしい光に尾もまず目をつぶる。光が治まったところで、そっと目を開けるとそこには、以前見た雪景色が広がっていた。

……おかしい。今は確か初夏だったはずなのに。ふらふらと目線をさまよわせると、怨霊に襲われている朔と白龍がいた。

自分がここにいる理由もわからないまま、ただ助けなければと二人の元へ駆けつけた。

前はとても恐ろしく感じた怨霊を難なく倒す。そこで、朔が私のことを知らないことを知った。

驚いて言葉に詰まってしまった私の様子を心配そうに朔が窺った。

「助ける、って言ったのに逆になってしまってごめんなさいね」

「ううん、私は白龍の神子なんだから気にしなくても大丈夫だよ。

……えっと、その、はじめまして」

彼女は混乱しながらも、再び戦うことを決意する。

はたして彼女はあの戦場を乗り越えることができるのか。

そして、譲が指摘した、ある人物がいないのはなぜか。

また、”彼”の存在はいったい何を及ぼすのか。

それは、まだわからない……。

更新予定日

11/3/1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3382q/>

運命の起点は此处に在り(遙か3)

2011年1月26日10時50分発行